

団塊の世代の老後に関する一考察
—団塊世代の人たちのケアについて—

社会福祉学専攻 島田 裕一

要 旨

第1次ベビーブーマーである1947年から1949年の間に時に生まれた、団塊の世代と呼ばれる人たちが、2015年に65歳以上となり、2025年には75歳以上となる。推計560万人¹⁾が一斉に後期高齢者となり、医療や介護需要増となることから、2025年問題と称されている。財源や介護人材不足の中、社会がどのように乗り越えるかが課題となっている。これまで時代の先頭に立ち、高度経済成長を経験し、これまで日本を牽引してきた中心的存在である団塊の世代の人たちは、介護を受ける側に回っても主役となることを考え、団塊の世代とはどのような人たちであるか、介護の視点からどのようなケアの提供が望ましいかを知る必要がある。

戦後まもなく出生した団塊の世代は、学歴社会の申し子、又は、金の卵として集団就職などの幹旋がある。学生時代に続き、社会に出ても競争にさらされてきた歩みや、時代の流れにより早期退職を余儀なくされる人など、その時代特有のヒューマンドラマがある。戦後の食糧難の時代に生まれ、誰もが貧しかった幼少時代を経て、豊かになっていく社会を実感しつつ、高齢期を迎えた現在ではどのようなニーズを抱えているのか。

本研究では、団塊の世代の人達の歩みについて調べ、その世代の経験則から得る共通の行動原理を見出し、他者理解をした上でより良いケアに繋げることを目的とする。

しかし年表を調べ、ただ出来事などを見ていくだけでは、団塊の世代の理解に近づくことはできない。そこで、出来事としての年表に、当時の物価、普及、流行や人の動きなどのデータを加えることで、団塊の世代の人たちの歩みの根拠を知り、通常年表には書かれない、その時代の価値観や考え方、どのような環境下で起きた出来事であるかを導き出し、共感的な理解、良いケアの方法に結び付ける。

本論では、学歴が及ぼす影響を中心に述べているが、学歴一つとってみても、現在とは価値観が異なることが分かった。進学率、受験戦争、経済状況などの背景の違いが明らかであり、その状況下で進学、就職を選択する意味も大きく変わってきている。そのような現在の価値観や考え方とは異なる部分の理解は、対人援助において、あらゆる方向の総合的なケアに繋がる可能性を秘めている。なぜなら相手の持つ価値観に沿ったサービス提供ができるからである。

その時代を直接経験していない支援者にとっては完全なる理解は難しい。しかし少しでも他者理解を深めようとする姿勢こそが、高齢者介護に不可欠な共感的な姿勢であり、ケアの向上に繋がる要素ではないだろうか。